

Benaki, Antony E.(ed.)

Hellenic national costumes. 2v.

Athens, Benaki Museum, 1948-1954. (文献番号 7-99)

ベナキ編

ギリシアの民族服 全2巻

本書は、18年間の準備期間を経て発行された、多種多様なギリシアの主な民族服を図版中心にまとめた労作である。112枚の図版中、86枚がアテネのベナキ美術館所蔵の衣装からの描写であり、その他は個人所蔵からの描写である。解説は、ギリシア語、仏語、英語によって記され、巻末には用語索引も付されている。

編者によれば、この図集の目的は、廃れつつある民族服への愛好や関心を鼓舞するのはもちろん、ギリシア芸術の一部としてのこの秘蔵品を一般に知らせるためである。残存するこうした日常の衣装は、この国がたどった戦争の荒廃した影響の結果として、また所有者の無知や無関心さなどによって次第に失われつつある。

当時ギリシアには専門家がいなかったので、図版は、1930年にエジプトからこの製作のために招かれた白系ロシアの細密画家スパーリング(Nicolas Sperling)によって、水彩で描かれた。図版の完成後、ギリシアの一般芸術の研究をしていたハジミカリ夫人(Mrs. Angeliki Hadzimidhali)が各図版に解説を加えて、ギリシア衣装の序論を記す仕事を引き受けた。

図はアッティカ——サラカツァンの衣装。

生っ粋のギリシア系のサラカツァン人は、その習慣、伝統、工芸などを損なわずに温存し続けている遊牧民族である。ギリシア全土にわたる彼らの衣服は、女性によって、す(梳)き、染め、織った羊や山羊の毛から作られ、裁断、縫製、刺繍までのすべてを自分たちで行った。サラカツァンの女性の衣装はほとんど変わらずギリシア中が、同じ地味な配色でその最も特徴的な部分の一つは、独立戦争間に活躍したゲリラ兵首領たちの胸飾りに似た、大きな銀や銀めっきの装身具で、第一子の誕生まで新婚の女性が身に付けている。

